ラルヲースに遊ぶの記（圖版第三版の説明）

槇山次郎

昭和三年の夏英國南海岸ボルヌマウスに滯在してハムプシアの地質特に始新世の岩石を見化石の採集にすごした間にバーベック島のラルヲースに一日を費した事があつた。ボルヌマウスはサーザンプトンの西十數哩にあり英國有數の住宅都市で人口約二十萬、隣州ドーセットのプールに連續し之を合すれば、四十萬、清潔美麗の地、多くのホテルがあり物價高らず氣もちのよい所であつた。バーベックは島と稱するが實は半島である、だからボルヌマウスから樂に遊に行く事ができる。八月三日金曜。朝八時と定つてゐる食事をすませるとすぐ飛び出てスクエアから電車に乘りレッドヒルのガラーデに行く、我バス（自動自轉車）ER二二八六は默々主人を迎へてくれる。プールの町の北方を廻り道をエアハムにとる、十八哩、小き田舍町ではあるが車の往來は可なりに多い。ペトロール一ガロンを買ふ、代一志三片半、オイル一パイント一志、此だけで今日は心配ない。此町を直南に出る道は半島の東岸スワニデに通ずる。私は右、則西に折れデボンへの本街道をなほ二哩走りホルムから南に入る里道を撰ばねばならない。此等の道路は孰も充分にタールで固めてあるから速度を高めるに好都合である。ホルムからラルヲースまでヒース（草の荒地）中を横斷する。羊齒類とハリシダ、此樣な廣い原を如何に不毛なりとて野兎のはびこるにまかせてあるのは極東の人口過剩國民から見るともつたいないとしか思へない筈だが恰度幸とバスを止めて暫休息する。東ラルヲースに同名のキャッスルがある、綠の森とパークに圍まれた豪族エルドの住家であつた所、パークは公開されてゐる。西ラルヲ

ースへ次第に坂となる。此處に兵營がある。急坂を下れば西ラルヲースである。坂を降り切つたらプラグの故障が出來た、カーボンの沈積をナイフで清めエンヂンは再び動く。

バーベック地方には二列の丘陵が東西に走る、北なるはバーベックヒル、高さ平均五百呎、地質はチョークで狹いリッヂをなしてゐる。南の丘は巾廣き頂ありジュラ紀主にバーベッキャンの固い岩石よりなり四百呎の高さあり。此二丘列の間の谷は軟いウヰルデンの地層で一般の傾斜は北で南へ下位の地層がつづく。北に第三紀層のレディング層ロンドンクレイ及バグショット層の低平なる地がある。今朝はラルヲースまで此第三紀の平原の上を來て今バーベックヒルを越した處である。しかるに此處では海が近くせまり來り南丘は其半以上を失ひ且低いのである此は地層の傾斜が半島の西端ほど急で露出面の巾が狹くなつたからで海蝕は南丘を斜に切り更に北丘にもせまつてゐる。口繪のラルヲースコーブは實に此海蝕が南丘の堅岩を破りウヰルデンの軟い砂層に食ひこんで出來た圓い小灣である。形は恰噴火口の如くであるが然らず單に海蝕にすぎぬ。灣の奥には白いチョークの絶壁が見へてゐる。

圖の一は灣の北空上より見たるもの他は灣口にて北の岩壁を寫したものである。灣内に見學し得る地層はチョークより下位で順にゴールト、下綠砂、ウヰルデン、バーベックで灣口の堅岩は最後のもの、南には絶壁下にポートランド層を見られキンマリッヂクレイのタイプロカリティも遠くはない。灣外南の斷岸には危險を冒して化石森林を見る。私は午前中北側を見て晝は名物海老にてすませ午后は南側をあるいて少々の化石を採取した。化石森林も見た。ホテルに歸つたのは七時前であつた。